

スペイン語圏を知る本
(その34)

福嶋教隆 著

『スペイン語の贈り物』

現代書館 2004

評者 坂東 省次

スペイン語人気の高まりから、近年、スペイン語の学習参考書が多数出版されている。関係者としては嬉しい限りであるが、似たようなものが多く多少の不満もあった。もう少し個性があってもいいのではないかと思っていた。そんな中で刊行の運びとなった本書『スペイン語の贈り物』は、数あるスペイン語の参考書の中でも個性豊かでまさに異色の一冊と言えよう。

著者は日本を代表するスペイン語学者である。スペイン語でも特に文法（接続法）研究と日本語・スペイン語の対照研究を専門としている。本書は長年わたるスペイン語研究の成果の一部であるが、その成果を一般読者の手のとどくレベルに落として、じつにわかりやすくスペイン語世界に案内してくれる。スペイン語は難しいと思っている学習者も、楽しくスペイン語を学べることだろう。

本書は全5章からなる。1章から4章まではNHKテレビ、ラジオスペイン語講座のテキストに、また5章は月刊言語にすでに掲載されたものであるが、本書出版のために大幅に書き改められた。すでに個々の原稿を雑誌上で読まれた方もいるであろう。そんな方も新しいテキストをしかも今度は、いっきに通読されたいかがであろうか。印象を新たにすること間違いなしである。

第1章「スペイン語の世界」では、スペイン語とはどういう言語か、いろいろな角度からスケッチしている。身近なスペイン語としてエルニーニョ、リアス、カルデラ、オレ！、ナタデココなどをあげ、「現代では、スペイン語は商品名によく利用されます。特に多いのは自動車です」といって、クレスタ、グランビア、カミノ、シーマ、セフィーロ、プリメーラ、ディアマンテ、ドミンゴ、ファミリア、バモスを例にあげている。そんなスペイン語がどのように生まれ、どのように世界に拡張してきたか、またそのスペイン語の辞書にはどん

なものがあるのか、興味は尽きない。

第2章「スペイン語と日本語」では、スペイン語と日本語を比較対照しながらスペイン語の特徴をとらえ、語学上達のヒントを探そうとしている。語形変化、語順、言葉の省略、言葉の繰り返しなどなど、日本語と対照して考えることでスペイン語の理解度はおおいにアップするのではないだろうか。

第3章「からだで覚えるスペイン語」では、目、鼻など「からだ」を表す言葉を用いた表現を探しながらスペイン語を学べる。私たちは日頃、身体の部位を用いた慣用句に多数接している。辞書で身体の部位を表す単語をみれば、一目瞭然である。

第4章「スペイン語文法Q&A」では、「事実」でも接続法、es que＝「のだ」？、再帰受動文はいつ使う、といった質問を立てて、著者がそれに懇切丁寧に答えてくれる。日頃なぜだろうかと疑問を抱きながら、それに答えてくれる参考書が少ないために、そのままにしているケースが多いであろう。その意味で、「スペイン語文法Q&A」が一冊の本になれば、スペイン語学習者のみならず、スペイン語教師にも参考になるだろう。

第5章「スペイン語学へのチャレンジ」では、「スペイン語学」のスタンスからスペイン語を見つめる発想法へのチャレンジが待っている。ここでは借用語、擬音語、語尾脱落、複合語などのルールが明らかにされるだろう。

スペイン語学習者が増加の傾向にある中で、スペイン語の参考書にもこの類の本がもっともっと出版されることが必要であると思うのは筆者一人ではないだろう。ただし、初級者のための文法書を書ける人は多くいても、この類の本となると執筆者は限られてくる。スペイン語はもとより日本語あるいは言語学など広く深い知識が必要だからだ。一方、この類の本を読まれる方はまず初級文法程度の知識が必要だろう。しかし、単に知識だけを求める読者では困るわけで、著者が望んでいるように、本書で学んだことを実践でおおいに活用される読者であってほしい。

ばんどう しょうじ (教授・スペイン語学)